2021 vol.65

UR PRESS

UR都市機構の情報誌［ユーアールプレス］

東日本大震災から10年

特集 未来へ続くまちづくり

Special Interview

音楽の力を信じ 仲間と共に支援活動を続けていく

シンガー・ソングライター
さだまさしさん

2021 Vol.65
UR
UR都市機構の情報誌［ユーアールプレス］
PRESS

CONTENTS

01 暮らしのカケラ⑯ 「ありがたい縁」 角田光代

03 Special Interview 未来を照らす㉓
さだまさし さん シンガー・ソングライター
音楽の力を信じ
仲間と共に支援活動を続けていく

07 特集
東日本大震災から10年
未来へ続くまちづくり
09 震災を経て輝きを増す わくわく、きらきらのまち 宮城県気仙沼市
11 子どもたちが誇りをもてる 魅力あふれるふるさとに 宮城県南三陸町
13 官民連携でつくる 新しいまち「女川」が誕生 宮城県女川町
15 新たな挑戦に期待が膨らむ 生まれ変わったまち 岩手県陸前高田市
17 東日本大震災から10年 トップインタビュー
気仙沼市 菅原 茂市長
南三陸町 佐藤 仁町長
女川町 須田善明町長
陸前高田市 戸羽 太市長
21 URが取り組む東日本大震災の復興支援

23 佐藤可士和展で「団地の未来」について考えた

25 楽しい団地
堺市とタッグを組み、新しい拠点をつくる
泉北桃山台一丁団地（大阪府堺市）

27 URのまち あのまち・このまち・歩いてみよう！ その㉖
飛香台周辺（愛知県常滑市）

29 復興の「今」を見に来て！㉒
岩手山を望む災害公営住宅が完成 新しい暮らしが始まった
（岩手県盛岡市）

31 栗原心平のオトコめし❻ 鶏のみそごまがらめ丼
32 素敵に飾るインテリアグリーン❻ 貝賀あゆみ
ハイドロボールに植え替えて気軽に楽しむ観葉植物
32 防災、待ったなし！❻ 高荷智也
防災アドバイザーが常に持ち歩くグッズとは？

33 プレゼント付きクロスワードパズル
34 UR INFORMATION

季刊「UR PRESS」Vol.65 2021年4月30日発行

発行 独立行政法人都市再生機構
〒231-8315
神奈川県横浜市中区本町6-50-1 横浜アイランドタワー
Tel 045・650・0882 Fax 045・650・0889

制作 新潮社、編集室りっか
デザイン 太田デザイン事務所
印刷 大日本印刷
※本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。
※本文中の肩書きは取材時のものです。
写真撮影時のみマスクを外しています。
※掲載した情報は2021年4月1日時点のものです。

表紙の世界

4月まで新聞小説（河北新報）の挿絵を担当し、紙面から東北の今を垣間見ていました。その地の人々に思いを馳せながら、明るく開けた風景を描きました。

イラストレーション
小林マキ

角田光代 | 暮らしのカケラ 16

ありがたい縁

二〇一六年から約四年間、東北の被災地に通い、飲食店を紹介するという仕事をしていた。関東育ちの私は東北には縁がなく、二〇一一年の四月に仕事の依頼を受けて、東日本大震災の被害を受けた沿岸部の町を歩いた。それがきっかけで幾度か再訪するようになり、その延長線上に、その約四年間の連載の仕事があった。だから私は震災以前の町を知らない。

連載中は三カ月に一度、編集者とカメラマンと三人で二泊三日、福島、宮城、岩手、ときどき青森を旅した。そんな付き合いが続くと、縁のなかった町にも勝手にしたしみを覚えるようになる。私の訪問する町々は復興し続け、訪れるたびに表情を変えていくが、その、変わりゆく光景にすら、なつかしさを覚えるのである。一方で、そのことをずっとうしろめたく感じてもいた。

連載のための最後の取材は二〇二〇年の一月で、連載自体は二〇二〇年の三月に終了した。四月に緊急事態宣言が出されて県をまたぐ移動の自粛が呼びかけられたことを、私は不思議な符号のように感じていた。東北にいけなくなったから連載を終えなければならなかったのなら、もっと釈然としない気持ちになっていただろう。

ついこのあいだ、一年ぶりに宮城県の石巻にいった。かつての取材は車での移動だったけれど、私は運転免許を持っていないので、自由時間がたくさんあっても徒歩の移動しかできない。石巻に滞在すると、だから私はこれといった用もなく、中心街をただぐるぐる歩いていた。朝にランニングをするのが習慣なので、早起きして日和山を上ったり、川沿いを走ったりもしていた。

今回の石巻でも、知人と待ち合わせた時間まで、町をぶらぶら歩いた。石ノ森先生の漫画キャラのモニュメントやベンチ、旧観慶丸商店のビルだけでなく、ちょっとした路地や石畳、長い石段もがなつかしい。ひとりで飲んだ屋台のバーがなくなっていたり、おしゃれなお店ができていたり、あたらしい橋ができていたりする。新規オープンの飲食店を見つけると、自分の住んでいる町ではないのにわくわくする。定期的に訪れた町だから見つける新発見であり、感じるなつかしさである。

今まで、仕事や休暇で旅をしてきて、再訪を願いながらかなわない場所のほうが多い。再訪できても、まったく町が変わってしまって、記憶とまったく重ならず、旅の記憶ごと失ったような心許ない気持ちになることも多い。そう思うと、やっぱり人と町にも縁があるなしが存在するように思えてしまう。震災後の縁と考えると、うしろめたさは消えないものの、でもやっぱり、東北の町との縁ができたことは、すでに故郷を持たない私にはとてもありがたいことだ。

かくた・みつよ
作家。1967年、神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。1990年「幸福な遊戯」で海燕新人文学賞を受賞しデビュー。『対岸の彼女』（文藝春秋）での直木賞をはじめ著書・受賞多数。最新刊は『銀の夜』（光文社）。

photo・T.Tetsuya

未来を照らす 28

Special Interview
Masashi Sada

シンガー・ソングライター、小説家、「風に立つライオン基金」の理事……といくつもの顔をもつ、さだまさしさん。多忙な中で続けてきたのが東日本大震災をはじめとする災害や医療の支援です。昨年は仲間と共に介護や福祉施設への支援も行いました。一方で、セルフカバーアルバムを制作し、コンサートを開催するなど、音楽の灯を守るための活動も続けています。

阿部民子＝構成、菅野健児＝撮影

「音楽の力を信じ仲間と共に支援活動を続けていく」

さだまさし さん シンガー・ソングライター

東日本大震災発生後、いち早く現地に赴き、ボランティアやチャリティーコンサートを行ってこられました。その原動力は何だったのでしょうか。

震災後、初めて東北に行ったのは2011年5月1日。石巻でした。40年来の友人である笑福亭鶴瓶に誘われ、NHKの「鶴瓶の家族に乾杯」の緊急ロケに同行させてもらったのです。音楽家が行っても何の役にも立たないのはわかっていたので、行くのはちょっと怖かった。目立たずに必要なときに取り出せる二つ折りになるギターを背負って行きました。

避難所の寺院で、テレビカメラがいなくなった後、僕と年が変わらない男性が、僕の手を握りしめてボロボロ泣くのです。「おふくろも孫2人も（津波に）持っていかれた。かみさんの車は見つかったけど、かみさんは見つかってない」って。この人の痛みは僕には絶対理解することはできないけれど、一緒に泣くことはできるかもしれないと思いました。

それからは、休みの日には東北へ行こうと自分に誓い、ギターを担いで、岩手、宮城、福島へ、「行っていいですか？　邪魔になりませんか？　さだまさしの歌を聴きたい人がいますか？」と連絡し、各地の避難所を廻りました。

「自分に何ができるのか」と自問しながらの活動でしたが、被災地で僕の歌を聴いている方々の写真を見たときに、皆さん笑顔だったのです。「この瞬間は、元気が出たのかな」と思うと、少し心がほぐれる気がしました。家族を亡くし、財産をなくし、家をなくした人たちが、僕と一緒に大きな声で歌ってくださる姿を見ると、音楽ってもしかしたら無力ではないかもしれない。微力だけれど

大船渡

陸前高田

東日本大震災後、被災地へ通い続けているさださん。学校の教室や体育館、屋外、いろいろな場で歌い、現地の人たちを励ましている。

ゼロではないんだ、と勇気をもらいました。それからは、メディアの目が届きにくい小さな避難所に積極的に出かけて、必要なことを聞いて、送れるものは送り、落ち着いたらギターを持って歌いに行くことを続けてきました。

震災発生から10年を迎えました。今、どんなお気持ちでしょうか。

僕はここからだと思っています。震災からの復旧では、安心して住める家と、津波が来たときに逃げる道路、高台の避難所をつくることが重要でした。そして、これからがいよいよ復興。復興は、前よりもよくしなければならない。道のりはまだまだ長いと思っています。

気仙沼で、ヘドロの中を歩きながら「絶対生きて家に帰って、さだまさしの曲を聞こう」と思って頑張ったという女性に会いました。そんな話を聞くと、「この人が求めているのは、現実の『佐田雅志』でなく、架空の『さだまさし』なのだろう。でも、それだけの力を持っているなら、今が『さだまさし』の使いどきだ」と。僕の力は微々たるものだけど、「さだまさし」を使って、支援を続けていきたいですね。

2015年に「風に立つライオン基金」を設立。僻地医療や大規模災害支援をされています。

休みごとに全国の被災地へ行き続けていた僕を見て、仲間が「機能的でないから、組織をつくったほうがいい」とアドバイスしてくれたのです。財団名の「風に立つライオン」は、ナイロビの医療発展に尽力した柴田紘一郎医師の活動に感銘してつくった曲のタイトル。財団名にするのは面はゆかったのですが、この曲は日の丸を背負って海外で働く医療関係者や商社マン、JICA（国際協力機構）や青年海外協力隊員などのテーマソングになっているという仲間の声に押されました。

海外で頑張っているお医者さんや看護師さん、教育者をそっと支援するための小さな基金のつもりでしたが、財団を立ち上げてすぐに茨城県常総市での水害、その後、熊本地震が起きて自然災害への対応も始まりました。皆さんからの寄付で成り立っている小さな財団なので、災害現場を仕切るようなことは不可能で、ボランティア団体と連携して、彼らを支援しています。

さだ・まさし

長崎市出身。シンガー・ソングライター、小説家。1973年フォークデュオ・グレープとしてデビュー。1976年ソロ・シンガーとして活動を開始。「関白宣言」「北の国から」など数々のヒット曲を生み出す。通算4,450回を超えるコンサートのかたわら、小説家としても『解夏』『風に立つライオン』などを発表。多くの作品が映画化、テレビドラマ化されている。2015年、一般財団法人 風に立つライオン基金を設立（2017年に公益法人として認定）。さまざまな助成事業や被災地支援事業を行う。最新刊は、コロナ禍での思いや活動を記録した、『緊急事態宣言の夜に』（幻冬舎）。6月から全国コンサートツアーを予定している。

4月にリリースされたセルフカバーアルバム「さだ井～新自分風土記Ⅲ～」。「奇跡2021」をはじめ数々の代表曲に加え、AC JAPAN CMソング「にゃんばく宣言」も収録。VICL-65489

たとえば現地で備蓄物資を使って炊き出しをする団体に、事後に補填物資を送る。その場合、現地にあるものは現地で購入して、経済を回す。落ち着いた頃には「さだまさし」を使って、ライブをやる。そんな活動を続けてきた後、新型コロナウイルス感染症の流行が起きました。

コロナ禍では、どのような活動をなさっているのでしょうか。

昨年4月、都内の病院に勤務する財団理事の親戚から、医療現場でマスクが不足していると聞きました。すぐにマスク3万枚、防護用エプロン1万着などを集めて、100カ所を超える病院や福祉施設へ送りました。

5月からは福祉施設に財団から医師や看護師を派遣し、あるいはリモートで、感染防止のための勉強会を始めました。医療崩壊の次に怖いのが、福祉崩壊だからです。長崎の名物料理「チャンポン」にちなみ、「ふんわりチャンポン大作戦」と名付けました。同時に、組織を超えて人をつなぐ人材をチャンポン大使に任命。財団を通じて、関係者をつなぐプラットフォームづくりをしています。

当初は年末までの活動予定でしたが、年が明けて再度緊急事態宣言が出されて……。ふとまわりを見ると、福祉施設の人たちはへとへとで、医療施設の人たちは伸びきったゴムみたいにはなく、基金の評議員でもある鎌田實先生（諏訪中央病院名誉院長）や僕がパスを出すと、支援が必要な場所に誰かが行って、動いてくれる。まるで映画「アベンジャーズ」のように、感染症や福祉の専門家がどんどん集に現状を見て、僕たちがすべきことを考え、着実に続けていきたいですね。

昨年は感染拡大防止のため、コンサートが中止や延期になるなど、音楽活動にも大きな影響がでました。

くたびれている。これは何かしなくてはと、財団を応援してくれている「猿田彦珈琲」のコーヒーと「浅田飴」の飴を「お疲れさま」の気持ちを込めて現場にお配りしました。

いずれも僕が直接動くわけでまって応援してくれています。

多くの活動を通じて学んだのは、支援には、まず緊急手当をする、次に行動的なお手伝いをする、さらに働いている人たちの心のケアをするという段階があることです。これからは冷静っぱいになってもらいたいと「さだ井」と名付けました。9月からはコンサートを再開。基金に協力してくださっている感染症の専門医から指導やアドバイスを受け、最大限の防御策を講じて。おかげさまで2月まで41公演、1人の感染の報告もなく乗り越えられました。

昨年は2月半ばから7月までまったくコンサート活動ができませんでした。そこで、半ば開き直って、その間にアルバムをつくりました。映画やドラマの主題歌、コマーシャルなどで使われた曲を集め、歌でおなかいいコンサートツアーが始まります。会場への動員数が減ります と興行的には厳しいですが、どうにかして音楽の灯を守りたい。なかなかCDを買ってもらえず、コンサートもできない今、音楽家は非常に苦しい状況に置かれています。それでも、クオリティを下げず、今できる最高のものをやる。意地のような気持ちですが、きっと後になって頑張った意味がわかる日がくるだろう、と思っています。

「UR PRESS」オンライン版で、パソコンやスマートフォンからさだまさしさんのインタビュー動画がご覧いただけます。（2021年7月末まで）

WEB UR PRESS

WEB UR PRESS

「UR PRESS」オンライン版で、パソコンやスマホからドローンで撮影した気仙沼の動画がご覧いただけます。

特集

未来へ続くまちづくり

東日本大震災から10年

UR都市機構はこの10年、東日本大震災からの復興支援に組織をあげて取り組んできた。今年3月、URが津波被災地区の22地区で整備したすべての宅地の引き渡しは完了したが、それぞれの地区での未来に向けた“まちづくり”はまさにいま始まったばかり。その挑戦が各地で続いている。

宅地整備が完了した宮城県気仙沼市。3月6日に三陸沿岸道路が宮城県内全線開通し、仙台と片道約2時間で行き来できるようになった。この気仙沼湾に架かる気仙沼湾横断橋（かなえおおはし）は人気スポットに。

福田正紀=ドローン撮影

住宅や商業施設が次々に建設され、活気にあふれる鹿折地区。

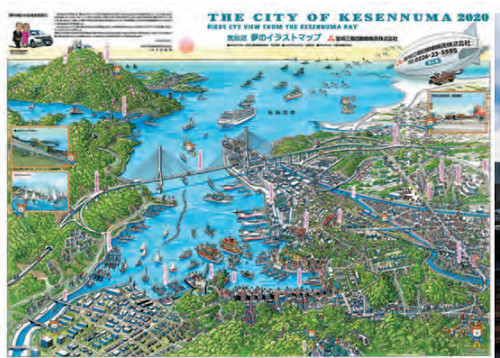
震災を経て輝きを増す わくわく、きらきらのまち

宮城県 気仙沼市 Kesennuma

3月6日、三陸沿岸道路が宮城県内全線開通し、仙台から宮古まで結ばれた。
これにより岩手、宮城の沿岸部へのアクセスが格段に向上。
なかでも注目を集めたのが、ルート上に誕生した眺望抜群のスポット、
物資や人だけでなく、希望も運ぶ気仙沼湾横断橋（かなえおおはし、P7〜8写真）だ。

「ここに橋が架かったらいいなと夢見ていましたが、まさか三陸沿岸道路が通るとは思わなかった」と笑顔で話すのは、気仙沼在住、宮城三菱自動車販売（株）の千田満穂（ちだみつほ）会長だ。還暦を機に、自身が理想とする気仙沼の未来絵地図の制作を始めた千田会長。改訂を重ねた絵地図は現在6版になるが、気仙沼湾にかかる橋は2000年の初版から描かれていた。

「橋の上から風光明媚なまちを見てもらい、気仙沼っていい所だな、こんど恋人や家族と一緒に来ようと思ってもらえたら」というのが橋に込めた思いだという。



上／千田会長が理想を込めて制作した「気仙沼夢のイラストマップ」の最新版。千田会長のディレクションのもと、土橋征史氏がイラストにした。

右／宮城三菱自動車販売の千田会長。震災当日に可能なかぎりの軽自動車を発注。確保できた115台を市民に貸し出した。今後は気仙沼大島の観光整備に尽力したいと話す。

妹尾和子=文、菅野健児=撮影

上／土地区画整理事業を行った南気仙沼地区で、URが最後に整備した大川公園。以前の公園や河川緑地にあった碑と桜の木を移植した。

左／南気仙沼地区の中心地。夜になると災害公営住宅の灯りが目を引く。

地盤沈下したまちを造成し直す難しさ

沿岸地域でも湾の形状や向きなどにより、東日本大震災の津波の被害状況は異なる。気仙沼の中心市街地は家屋や建物がある程度残ったものの地盤が沈下し、満潮時には浸水する状態に。URは現地に事務所を置き、南気仙沼や鹿折（ししおり）地区の区画整理事業や災害公営住宅の建設を支援してきた。今年3月に事業が完了し、整備された市街地には集合住宅や戸建て住宅、スーパーや旅館などが建ち、新たなまちの顔を見せている。

「下水道や光ファイバーなどライフラインが張り巡らされていた市街地の整備は、まっさらにして造成し直すのとはまた別の難しさがありました」とUR気仙沼復興支援事務所所長の佐光清伸は説明する。多数の関係機関と調整を重ね、道路を何度も切り替えながらのスピードが求められる厳しい作業が続いた。

利便性の高いコンパクトシティになったと思うと話すのは、気仙沼市建設部の佐々木守部長だ。

「URさんがいなかったら、このまちはなかったですよ。いろいろな提案をしてくれて、住民説明会や議会にも同席して納得のいく説明をしてくれて。私にとってURの方々は戦友です」と目を潤ませた。

スピードが求められる復興、その時々で最善を尽くしてきたと振り返る佐々木部長。

復興の先に続くまちづくり

そして今、気仙沼は震災を経て力を蓄え、これからどのように発展していくのか、期待を集めるまちになっている。市が目指すのは「世界とつながる豊かなローカル」だ。気仙沼市震災復興・企画部の小野寺憲一部長は語る。

「まちの長い歴史の中の10年。壊れた道路や街並みを直せば、それで復興は完了ではありません。自分たちがやるべきことは、過去から受け継いできた人材や文化、自然といった地元の資源をベースにした、未来に向けたまちづくりです。この大きな軸のなかで、震災を契機に得られた環境をどう生かすかを考えてきました」

被災地支援として開かれた若手経営者の育成塾「経営未来塾」の卒塾生が、行政の施策やまちづくりに積極的に参加してくれるようになったことを受け、人材育成の重要性を実感。Iターン者や外部の人の力も借りながら、まちづくり人材の育成の機会を高校生や女性、シニアなどにも広げてきた。

「〝わくわく、きらきらのまち〟と表現しているのですが、自分たちが主役であり、まちを変えられる、チャレンジできると思えるまちを目指しています」と小野寺部長。

その効果は、市民の積極的なまちづくりへの参加や若手移住者の増加など、さまざまな面で表れているという。5月からは気仙沼で生まれ育った女性が主人公のNHKの連続テレビ小説「おかえりモネ」の放送もスタートする。このまちの今後の飛躍が楽しみだ。

「気仙沼の東は〝世界〟です。外に開かれているこのまちの人は、支援を受け入れる〝受援力〟にも長けていると思います」と小野寺部長。若い世代のサポート役に徹することを心がけている。

住宅や病院、町役場などが整備された志津川地区の高台。

子どもたちが誇りをもてる魅力あふれるふるさとに

宮城県 南三陸町 Minamisanriku

気仙沼市の南に位置する南三陸町は、ラムサール条約湿地に登録された志津川湾をはじめ豊かな海・里・山がコンパクトにまとまったまち。復興まちづくりと並行して、この環境と地場産業を次世代につなぐための取り組みが進んでいる。

東日本大震災では16メートルに及ぶ津波で市街地が壊滅的な被害を受けた南三陸町。二度と津波で尊い命を失わないまちをつくると、職住分離の高台移転をベースとしたまちづくりを行ってきた。南三陸町と復興事業に関して包括的な協力協定を結んだURは、志津川地区の中心市街地のかさ上げをはじめ、災害公営住宅の建設、高台移転のための宅地造成などを支援。今年3月で事業は完了した。

住宅や店舗の移転に関してUR職員が心がけたのは、地元の方々の気持ちに寄り添い、できるかぎり個々の希望を尊重することだ。

安全かつにぎわいのあるコンパクトなまちを目指した志津川地区では、全国にその名を知られる「南三陸さんさん商店街」などの交流拠点や、そこから中橋を渡って回遊できる南三陸町震災復興祈念公園を整備した。来春には、道の駅と震災伝承館も完成予定だ。

高台に建てられた南三陸町役場の新庁舎。

2019年の台風19号でも被害がなかった高台の住宅地。

最後までやり抜く覚悟と見通しをもって

スピードが求められる復興支援で、URとして常に意識してきたのは、「大規模事業なので進捗がわかりにくいのですが、可能な限り効率的に事業を進め、1日でも早く住まいを完成させたい」ということだとUR南三陸復興支援事務所所長の佐光清伸はいう。

「URとしては、最後まで事業の責任を全うする使命感を持ちスタートしました。計画内容や事業スケジュールは関係者と綿密な調整を行いながら、きちんと仕上げることに力を尽くしてきました」

長年復興事業に関わってきた南三陸町職員の遠藤和美さんは、URの事務所が近くにあり、すぐに直接話ができたのがありがたかったという。

「メンバーが入れ替わっても皆さん情熱をもって取り組んでくださり、本当に感謝しています。震災後に生まれた子どもたちは、新しいこのまちがふるさとになりますから、誇りをもてる魅力的なふるさとになるように願っています」

南三陸町職員の遠藤さん。「早くコロナが収まって、きれいになったまちで、まちの人に夏祭りや海水浴を楽しんでもらいたいですね」

と遠藤さんは今後のまちの展開に期待を寄せる。

持続可能な水産業と林業に

「西の明石に、東の志津川」と評されるタコをはじめ、カキやホタテなどの豊かな漁場である南三陸町の志津川湾は、2018（平成30）年にラムサール条約湿地に登録された。さらに南三陸町はASC（水産養殖管理協議会）とFSC（森林管理協議会）の2つの国際認証を受けるなど、自然と共存した持続可能な産業が世界的に評価されている。良質な木材、「南三陸杉」の産地でもある。

ここで代々林業を営む(株)佐久専務取締役の佐藤太一さんの案内で、杉林へ向かった。青空に向かって杉が背を伸ばす林は木漏れ日に包まれ、気持ちがいい。

「震災後に一番気づかされたのは、自分たちは自然のなかで生きているということです」

そう話す佐藤さんは、震災のときは大学院で宇宙放射線の研究に携わっていたが、その後、家業を継ぐため南三陸へ。過去に何度も津波にあいながらも残っている山々は、今回の震災でも被害がなく、林道は避難路になった。そのことから、山林という揺るぎない財産をしっかり管理して守り、林業を持続可能な産業にしておけば、次に津波がきても立ち直りやすいと考えたという。そこで同業者と話し合い、FSC認証取得に向けて動き出した。一方、漁業はいかだの数を減らすなどして持続可能な養殖業へシフト。話し合ったわけではないが、同じ方向を向いていたという。

「震災後は将来のことしか考えられなかったから、未来志向に変化しました。南三陸のブランド化が必要だと。まだまだ課題はありますが、課題や未知の部分を解決していくのは魅力があるし、楽しい」と頼もしく語る佐藤さん。ワインづくりも始まるなど、豊かな自然の恵みを生かした新たな取り組みが広がる南三陸町。これからの展開に期待が高まる。

UR南三陸復興支援事務所所長の佐光。「南三陸町は活発な20～30代が多く、前向きな議論や活動が行われるので今後が楽しみです」

「台風や風雪が少ないこの地では、杉がまっすぐに伸びて年輪が詰まります。降水量を補って杉の生育を促すのは、ミネラルを含んだ海から立ち上る霧だと言われています」と(株)佐久の佐藤さん。オール南三陸杉材の住宅で暮らし、杉のあたたかさ、やわらかさを実感している。

上／南三陸町震災復興祈念公園の「祈りの丘」。

右／飲食店やショップが集まる南三陸さんさん商店街。

妹尾和子=文、菅野健児=撮影

水産業が盛んな女川。港にも活気が戻ってきた。海の近くには水産業体験施設「あがいんステーション」も造られた。

官民連携でつくる新しいまち「女川」が誕生

宮城県 女川町 Onagawa

URとパートナーシップ協定を結んで復興を推し進めてきた女川町。
ソフト面でも官民連携でのまちづくりが進んでいる。
女川は人口6,300人ほどの小さなまちだが、
復興の先に大きな可能性が見えてきた。

透き通るような青空の下、女川港には漁から戻った漁船が幾艘もつながれ、静かに波に揺られていた。手前には震災遺構の旧女川交番を囲むように、女川町海岸広場が広がっている。

この海岸沿いの女川町海岸広場が整備されて、URが女川町とともに進めてきた震災復興事業は完了した。UR女川復興支援事務所所長の沖田敏浩は、「女川はURにとって特別な地区でした」と話す。

10年前のあの日、14・8メートルもの津波に襲われ、まちのほとんどを失った女川町は、2012（平成24）年3月にURとまち全体の復興を包括的にサポートするパートナーシップ協定を締結。これはURが復興支援に取り組む自治体の中でも唯一のもの。「URとしても、町との信頼関係のもと、URの全面支援により復興が急ピッチで展開する状況を、モデル的につくり出したいとの思いがあった」と沖田はいう。

震災直後から10年にわたり女川町職員として復興事業を担ってきた佐藤友希さんは、URとのパートナーシップをこう振り返る。

「ハード面はもちろんソフト面でも、とにかくプロパー職員として判断しなければならない局面がめちゃくちゃ多いなか、URさんに幅広い業務を担ってもらったおかげで、町としてしっかり判断しながら進めることができました」

7～9mもかさ上げして造られたJR女川駅。2階には町営の女川温泉「ゆぽっぽ」も併設。

「この10年間、毎年、去年よりできることが増えている実感がある」と充実した表情で語る、女川町復興推進課の佐藤友希さん。

港の前には、震災遺構の旧女川交番を囲むように、女川町海岸広場が整備された。

上／住宅地は高台に造成され、新しい暮らしが始まっている。

左／女川町でURが手がけた災害公営住宅は561戸にも及ぶ。

新しい女川を自分ごととして考える

震災前から人口減少が進んでいた女川町の新たなまちづくりは、官民が連携する形で進められ、復興のひとつのモデルとして注目されている。

まちづくりに関するワーキンググループが多数つくられ、例えば「海岸沿いの空間をどうするか」といったテーマで住民と行政が話し合う場が何度も設けられた。そうして住民の意見を形にしていくことで、「このまちのことを〈自分ごと〉として考える人が増え、この新しい女川は自分たちがつくったんだと思える人がたくさんいるまちになりました。あの震災があったから、人々の意識が変わったという面もあるでしょう。もちろん自分も変わりました。これからも町民と一体となって、さまざまなことに取り組んでいきたい」

佐藤さんは、そう力強く話してくれた。

子どもたちが誇れる女川をつくりたい

創業100年になるという地元密着のスーパー「おんまえや」を率いる佐藤広樹さんは、昨年、津波で流された店を同じ場所に再建した。店舗の正面には、「まち、ひと、もの　すべてにありがとう」と感謝の言葉が書かれている。

「この言葉通りの気持ちです」と話す広樹さん。津波で何もかもなくしたが、「自分の代で旗を降ろしたくはない」との思いで、頑張ってきた。

「元の場所に店を再建すると、昔からのお客さんが戻ってきてくれました。まちは新しくなったけれど、『おんまえや』に行けば誰かに会える。みんながそう思える空間をつくりたかったんです」

どんなまちになってほしいかと尋ねると、「このまちで覚悟を決めて、再スタートを切りました。パパがやってきたことはすごいなと、子どもたちが誇れるようなまちにしたい」と話してくれた。

URの沖田が言う。

「震災復興はハード面を造って終わりではありません。官民連携で進んできた女川のまちづくりは、今後、人口が減少していく日本の他の地方都市でも参考になるはずです。これからも女川町とともに考え、模索し、お互いを高めていける関係を築いていきたい」

URのまなざしは、復興のその先に注がれている。

「震災で失ったものはあまりに大きい。でも、得たものも少しだけどありました」と話す「おんまえや」の佐藤広樹さん。

URの沖田は「人口が減少する地方にあって、いかに活力を持続できるか、女川のこれからが楽しみ」と話す。

かさ上げ地に商店や商業施設、公共施設が建つ高田地区。

新たな挑戦に期待が膨らむ生まれ変わったまち

岩手県 陸前高田市 Rikuzentakata

白砂青松の景勝地「高田松原」を飲み込み陸前高田の市街地を襲った15mに及ぶ津波。
陸前高田市の被災面積は東北の被災3県でも最大だった。
甚大な被害を受けたまちが整備され、いま新たな息吹に包まれている。

陸前高田市職員の青山さん。「かつて伊達藩の代官所が置かれていた今泉地区は歴史と文化のあるまちです。山車をぶつけ合う祭り〝けんか七夕〟が有名です」

陸前高田市が復興まちづくりで目指したのは、多重防災型まちづくりだ。URは最大12メートルに及ぶ市街地のかさ上げ、移転のための高台造成、避難路の整備などを市と共に行ってきた。市内の高田・今泉の2地区あわせて300ヘクタールという事業規模はURが関わった復興まちづくりでも最大。時間短縮のため「復興CM方式※」に加え、大量の山の土をかさ上げ地へ運搬するためのベルトコンベヤーを導入。これにより想定で8年半かかる工期を約6年短縮した。

すでに引き渡し済みの高田地区には災害公営住宅をはじめ商業施設「アバッセたかた」や公共施設などが建つ。そして本年1月、URが担当した市内のすべての宅地の引き渡しが完了した。

「安全安心かつ景観に配慮したまちづくりを進めてきました。市民の皆さまには大変お待たせいたしましたという思いです。同時に、これだけの規模の事業をお約束の期限内に完了できたことに胸をなでおろしています」

陸前高田復興支援事務所所長の関俊介はそう振り返った。

難題に挑んだ今泉地区の造成

高田地区をバックに今泉地区の高台に立つURの関（右）と柴田。「市の意思決定が早かったおかげで事業を予定通り終えることができました」

最後の引き渡しとなった今泉地区は気仙川から山がそそり立つ平地の少ない地域。津波で低地部は全壊したため、山を造成して高台へ移転した。土の搬出地でもあった今泉地区は造成工事にかけられる期間が短く、かつ三陸沿岸道路（国）や国道45号（国）、国道340号（県）、河川護岸（県）など関連事業者が多いため調整が非常に重要だった。陸前高田市復興局市街地整備課の青山豊英さんは、「市職員に300ヘクタールもの大規模な区画整理の経験がないなか、UR

上／高田地区の商店街。今泉・高田地区ともに七夕のお祭りで巨大な山車が出るため、通常のアスファルトより強度を高めた。
右／2014年、高田地区に先行して建てられた下和野災害公営住宅。現在、背後の山側に市役所を建設中。
下／高田松原津波復興祈念公園内に建てられた「道の駅 高田松原」と東日本大震災津波伝承施設「いわてTSUNAMIメモリアル」。

上／地元の杉材で建てられたカモシー。名称は、酒や醤油をつくる意味の「醸す」に由来。イートインスペースがある一方、自宅のお鍋を持って総菜を買いに来る人も。貸しスペースでのイベントを楽しみに訪れる人も多い。
左／カモシーで発酵食品を使ったおひつ膳と甘味のお店「発酵食堂やぎさわ」を展開する八木澤商店の河野社長。「うれしいのは、地元の人たちが毎日のように来てくれること。外から知り合いが来たときに、〝おらがまちには、カモシーがあるぜ。おいしいものがあるし、面白い人がいるから行こうぜ〟と言ってもらえたら最高です」

さんには関係機関との間に入って調整いただき、円滑に進めていただきました」と話す。地元の人々と話し合いを重ね、歴史があり、味噌や醤油の醸造所が集まっていた震災前のこの地区の雰囲気を残しつつ、防災に強いまちづくりを進めてきたという。

基盤工事を担当したURの柴田敏博は、「地権者の方々、被災者の方々に早く土地をお返しするために、役割分担や工事展開計画には慎重に取り組みました。皆さんのご協力のもと一枚岩で進めることができ、ほっとしています」と語る。雨水・排水がきちんと流れ、かつ災害時でも噴き出すことのない配管や道路の勾配を緻密な計算のもとに進めるなど、目に見えない生活インフラの整備も徹底した。

新たな拠点が誕生 注目の「カモシー」

「山に造成されたまちに、子どもたちの声が響いて、お年寄りがひなたぼっこしていて、すごくいい雰囲気です」と話すのは、今泉で江戸時代から醸造業を営む（株）八木澤商店の河野通洋社長だ。昨年末、今泉に誕生した発酵のテーマパーク「CAMOCY（カモシー）」の立ち上げ先導者でもある。

「今泉を離れた人が帰ってきたときに懐かしいと思える、発酵食品が作られる音やにおいを残しておきたかったんです」と河野さん。

ベーカリーやオーガニックチョコレート工房、ビール醸造所、デリカテッセンなどが入店しているカモシー。ショップオーナーには地元出身者もいれば、震災後に陸前高田と関わり始めた人も。いずれも陸前高田のまち、そして微生物の可能性に共感・賛同した人たちだ。河野さんの感覚では、今泉は震災前、保守的な地域だったという。

「それが津波で全部もっていかれて、仲間がたくさん亡くなって。そこに世界中から助けが入って、新しい仲間が生まれて、新たな挑戦が始まって。今はどう恩返しするかに進んでいます。新しい門が開いた感じで、今後が楽しみです」

市内では市立博物館やワタミオーガニックランドのオープンも控えている。昨年秋にはEVバスの実証実験が行われ、新たなまちで新たな挑戦が始まっている。交流人口が増えれば必要なものも増えるので、新しい仕事をつくることができ、雇用の拡大にもつながる。

「若い人たちは挑戦がおもしろくて仕方ないようです。そしてこのまちには『人口が少なくたっていいんだよ。世界の人口はどんどん増えるんだから、その人たちを受け入れられるまちを今から一緒につくらないか』と子どもたちに言える大人がいるのです」と河野さん。仲間との夢や構想は膨らむ。

カッコイイ大人たちがいる陸前高田は、訪れる人に勇気と優しさをシェアしてくれるまちでもある。

※受注者が調査、測量、設計および施工の一体的なマネジメントを行う方法。東日本大震災の復興のためにURが作り上げた。

10年を振り返っての思い、
これから目指すことについて
4市町のリーダーにうかがいました。

災害公営住宅や商業施設が建つ南気仙沼地区。高層の集合住宅は災害時の一時避難場所になる。

都会から足を運びたくなる人が輝くまちに

気仙沼市 宮城県 菅原 茂 市長

多くの入江があり、もともと平地が少ない気仙沼市。その平地が津波で被災し地盤も沈下したため、仮設住宅の建設地の確保には大変苦労しました。住宅の建設地にも苦慮するなかで採用されたのが、津波から守ることができる土地を造成するという土地区画整理事業です。とはいえ損傷したライフラインを整備し直し、雨水排水などの勾配もとりながら、通行を止めずに道路を切り替え、その上、公営住宅も建設していくというのは非常に複雑で困難な事業。市の力だけでは到底難しく、URさんなど専門の方々のおかげで進めることができました。

復興が遅れれば人口流出が進みます。住宅に関しては、高齢になってからの暮らしやすさも考え、もともと商業地でにぎわいがあった利便性が確保できる地域に、高層の災害公営住宅を優先的に建設。また道幅が広く、先が見渡せるカーブの少ない幹線道路を整備することで、まちの中心部の移動時間の短縮も実現しました。ハード面では理想とするまちのかたちになり、大きく前進できたと思っています。

仙台から車で2時間 アクセス至便に

震災から10年、私たちが進めてきたのは、市民が主役のまちづくりです。「人からはじまる地方創生」を掲げ、その基礎となる「産業人材（経営者）」と「まちづくり人材」の育成に特に力を入れてきました。震災後、市外からたくさんの講師・メンター陣が来て鍛えてくださり、その後も学びを継続するなかで人材が活性化してきました。

私たちは今回の復興を、「もとに戻す」のではなく、社会課題を同時に解決する機会と考えてきましたが、振り返って議論が少なかったと思うのは、「この地域における本当に必要な創造的復興」と「人口減少時代における豊かさ」についてです。さまざまなトライをしていますが、我々の日々の悩みであり、継続的なテーマ。これは日本全体で必要な議論だと思っています。

3月に開通した三陸沿岸道路を利用すれば、仙台から気仙沼まで2時間弱。100万人以上を擁する仙台圏をマーケットととらえれば、私たちにとっては大変なビジネスチャンスです。また、新型コロナの影響でテレワークや副業が進み、郊外へ人がシフトし出したといわれています。気仙沼と仙台との2カ所居住は現実的だと思いますし、都会の人のノウハウを副業やボランティアで少し地方に分けていただくといったことも進むかもしれません。

私が若い頃は、〝陸の孤島〟といわれた気仙沼ですが、今や都会の人の日常的アクセス圏になったと感じています。

気仙沼市
観光キャラクター
「海の子　ホヤぼーや」

頂の見えない登山に挑むような再建。あっという間の10年でした

南三陸町 宮城県 佐藤 仁 町長

防災対策庁舎で被災し、津波と風雪に耐えながら生き抜きました。翌朝、壊滅したまちを見て途方に暮れましたが、再建するために自分たちは生き残ったという使命感で今日までやってきました。二度と津波で命を失わないまちにと職住分離の高台移転を決めたものの、圧倒的な職員不足。まちづくりという大事業を進めるにあたり、URさんに協力をお願いしました。

振り返れば、あっという間の10年。専門の方々からは「10年でまちをここまでつくりあげるのは、相当なスピードだ」と言われますが、復興に10年かかると言われた当初は、長すぎる、もっと早くできないのかと思いました。町民に「10年待ってください」と伝えるのはつらかった。頂の見えない登山に挑戦するようなものでした。

事情を知らない人は、高台を造成してすぐに住宅の建設をと思うのでしょうが、全国に散らばる相続権をもつ人への確認を含め高台の土地の取得には大変苦労しましたし、埋蔵文化財が出てきたり、想定より岩盤がかたかったり、早く進めたくてもできませんでした。「まだここまでしか進んでいないの？」と言われるたびに傷つきましたが、「うーん、頑張っているんだあ」と言いながら進めてきました。

そんなとき、URさんは現場見学会で子どもたちに重機を見せたり、見晴らし台をつくって造成の状況が見えるようにしたり。請け負った仕事をするだけでなく、町民の気持ちを考えて動き、待っている人たちの気持ちをつないでくれました。私は竣工式などでよく泣くんですが、私の涙を一番見たのはURの方々です。一緒に苦労してきた戦友みたいな存在です。

完成したステージで町民がいかに躍動するか

造成した高台に移転した方々からは、「こんな安心なところに住まわせてもらってありがたい」という喜びの声が届いています。一昨年の台風19号でも高台は被害がありませんでした。10メートルかさ上げした志津川沿岸部を含め、まちのインフラが整備されて舞台ができあがった今、重要なのは、このステージで町民がどう躍動するかです。

全国の知り合いから商品を集め、東日本大震災の翌月から「南三陸福興市」を開催した商業の人たち。林業のFSC、漁業のASCといった国際認証取得も震災を経て実現しました。まちをどうするのか、次の世代に何を残してバトンタッチするのか、各々が考えて行動したからです。持続可能なまちづくりは町民が主体。今後は、環境と防災を学べるまちとして交流人口を増やすことに力を注ぎたいと思います。

南三陸を明るく元気にするキャラクター「オクトパス君」

公共施設や住宅が整備された南三陸町の志津川地区。

生まれ変わった「女川町」が誕生。ここから第二のスタートです

女川町 宮城県 須田善明 町長

女川駅から海に向かって続く「シーパルピア女川」と「ハマテラス」。

10年たった今、町の基盤整備と住宅整備はほぼ終わり、女川町はコンパクトで新しいまちに生まれ変わりました。女川駅周辺に役所や病院などを集約させ、駅から海に向かう一帯は商業・観光エリアとし、高台に新たな住宅地を造成、新しい暮らしが始まっています。

震災前と比較すると人口は三分の二弱です。事業を廃業した方、住宅再建を待てずに転居した方も多くいます。一方、震災前とは異なる新たなにぎわいが生まれたのも事実です。特に女川の民間では、還暦以上の者は口出ししないという方針を決め、若者が前面に出て引っ張ってきました。これからのまちの中核となるのは自分たちだと、まちの将来に自分ごととして向き合い、「女川町復幸祭」の開催、商業施設「シーパルピア女川」「ハマテラス」の開業など、町内だけでなく町外の力も引き込んで復興を進めてきました。ここまでよい意味での化学反応が起きるとは思いませんでした。

もともと女川は港町で、よそから来るものを受け入れやすい土地柄です。震災をきっかけに、新たなものを生み出す土壌がさらに深まり、より強くなったと感じています。

イメージ以上のまちが完成 プレーヤーを増やせ

女川は町の規模に比べて被害が大きく、URさんと町全体の復興を包括的にサポートしていただくパートナーシップ協定を結びました。復興は時間との闘いでしたので、CM（コンストラクション・マネジメント）方式を採用。町が方向性を決め、URさんがそれを動かすエンジンとなり、設計・施工に関するマネジメントまで行いつつ工事を進めました。URさんは国や県など行政機関との交渉に長けており、そのおかげでスムーズに進められたことも多々あります。蓄積されたノウハウを活用し、ゼロからのまちづくりを予定通り完成させることができました。

復興したまちは、イメージ以上の出来です。6年前に女川駅と駅前広場が完成してその場に立ったとき、イメージパースよりリアルな空間・実物のほうに圧倒的なクオリティを感じました。これは初めての経験でしたね。

新しい暮らしは始まったばかりです。町内のスーパーが昨年再建されましたが、まだまだ日常の買い物には不便な面もあると思います。町の中心部を巡回するバスを走らせるなど、交通弱者への配慮も考えていきます。

そして、1人でも多くの人にまちづくりのプレーヤーになってもらうための、プラットフォームづくりを進めます。皆さんの力で、新しい女川町を育てていきましょう。

女川町
PRキャラクター
「シーパルちゃん」

誰もが失敗を恐れず挑戦できるまちに

陸前高田市 岩手県 戸羽 太 市長

東日本大震災が起き、「これが絶望というんだ」という状況のなか、こてんぱんにやられたこのまちに本当にまた人が住めるのかと思いながらの復興まちづくりのスタートでした。

この震災で陸前高田市では人口の約7％が犠牲になりました。歴史を振り返れば三陸地方は何度も津波の被害を受けていますから、こんなにつらい思いはこれで最後にしたい。明日のことではなく、50年後、100年後の未来を見据えてのまちづくりに取り組んできました。まちのなかに、もうひとつ防潮堤をつくったような、10メートルに及ぶ市街地のかさ上げもそのひとつです。URさんから工事を一括発注できる「CM方式」を提案いただき、発注をプロに任せられたのは、職員がたくさん犠牲になり最悪の状態のなかでの非常に大きな光でした。

今泉地区は低地が津波で全壊しましたが、地元の方は生まれ育った土地に住み続けることを望まれました。その思いを尊重し、裏山を造成して高台に移転することとし、また、造成で出た土を高田地区の低地部にベルトコンベヤーで運んでかさ上げに使うという我々ではありえない発想でURさんには工事を進めていただきました。その結果、土の運搬にかかる年数が大幅に短縮されたことはもちろん、ベルトコンベヤーの動きに市民が励まされ、また国内外で話題になって陸前高田というまちを知ってもらうきっかけにもなりました。

誰もが気兼ねなく暮らせる共生社会に

今、道路も建物も新しくなって、理想的なまちになりました。使えなかったはずの土地が、かさ上げでよみがえったのです。課題はありますが、市民が安心して生活できる場が整いました。

我々は震災で社会的弱者になり、水も食料も分けていただくという苦しい状況が続きました。お世話になった全国の方々への恩返しを含め、今後は私たちの経験、反省をきちんとお伝えし、このまちを、防災・減災を学んでいただくフィールドに、そして障がいがある人も高齢者も気兼ねなく生活できる共生社会にしていきたいと考えています。陸前高田のまちは一度なくなっていますから、失敗を恐れず誰もがチャレンジできるまちでもあります。

かさ上げ地には著名な建築家の建物がたくさんありますので、建築を中心とした観光も可能です。また、日本の土木技術も含めて、こんなに大規模なまちづくりができることを見ていただける場でもあります。URさんをはじめ建設企業の方々、国内外の皆さんから励ましを受け、ここまでこられたことに心より感謝申し上げます。

陸前高田市ゆめ大使
「たかたのゆめちゃん」
©Aid TAKATA

商業施設や公共施設が集まる高田地区。BRT陸前高田駅の近くには市立博物館を再建中で、今年、ホテルも着工予定だ。

URが取り組む東日本大震災の復興支援

URは、東日本大震災の発災直後から被災地へ職員を派遣し、復旧・復興支援に取り組んできました。
これまでに26の被災自治体と協定などを結び、
最大時には約460人体制で、復興市街地整備や災害公営住宅の建設などを実施。
復興事業の進捗にともない、多くの地域で新たな生活が始まっています。
現在は原子力災害被災地域の支援に力を入れ、ハード・ソフトの両面から
復興まちづくりを一体的に支援しています。

生まれ変わったまち、暮らしを支える住宅

2 宮城県南三陸町　南三陸町震災復興祈念公園

1 福島県大熊町　大川原地区商業施設

5 岩手県盛岡市　県営南青山アパート

4 宮城県女川町
女川駅前ロータリーの震災復興事業記念碑

3 岩手県陸前高田市　高田地区

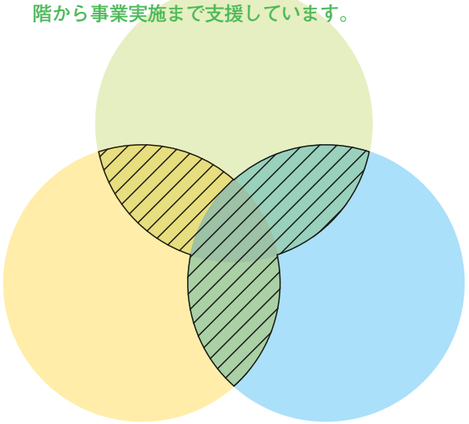
福島原子力災害被災地域における復興まちづくり支援

Ⅰ 復興拠点整備（事業化支援）

自治体からの要請に基づき、住民の生活再開や地域経済の再建の場となる復興拠点を整備するため、基本構想や基本設計等の構想・計画段階から事業実施まで支援しています。

Ⅱ 発注者支援

自治体が発注する公益施設の建築工事等について、基本構想・基本計画検討の段階から設計及び工事の発注手続き等の支援、さらに設計及び工事の品質・工程・コストの管理、各種申請手続き等を支援しています。



Ⅲ 地域再生支援

避難の長期化等により、住民も経済活動もゼロからの出発という背景から、持続可能な地域社会の再生に向け、様々な分野の課題解決に資する関係人口の案内・誘導やソフト的取り組みの支援をしています。

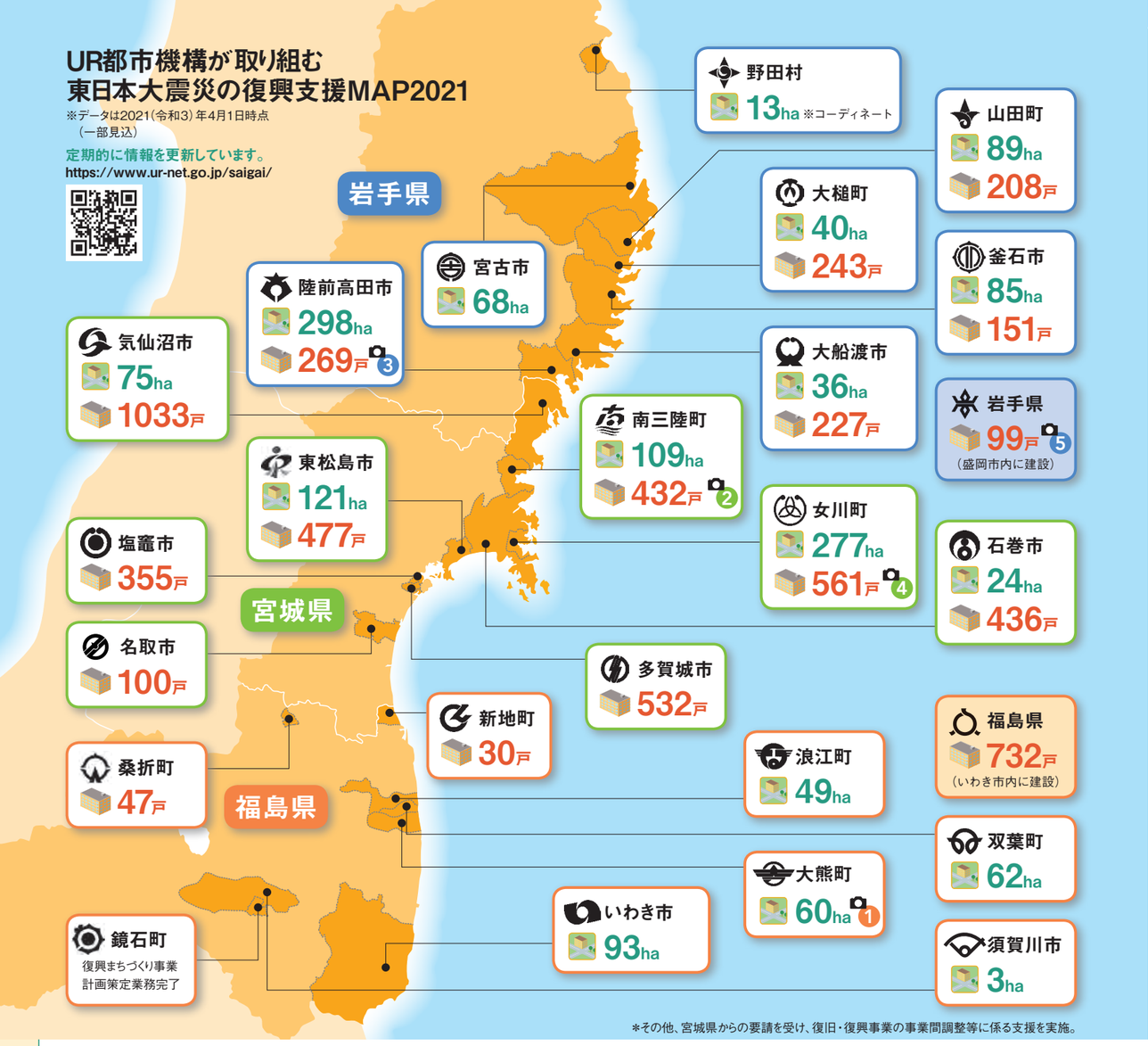
取り組みの内容

UR都市機構の支援は大きく3つの形があり、自治体のニーズに対応した支援を実施しています。これら3つの支援領域が渾然一体となりながら、復興まちづくり支援を推進しています。

UR都市機構が取り組む東日本大震災の復興支援MAP2021

※データは2021（令和3）年4月1日時点
（一部見込）

定期的に情報を更新しています。
https://www.ur-net.go.jp/saigai/



＊その他、宮城県からの要請を受け、復旧・復興事業の事業間調整等に係る支援を実施。

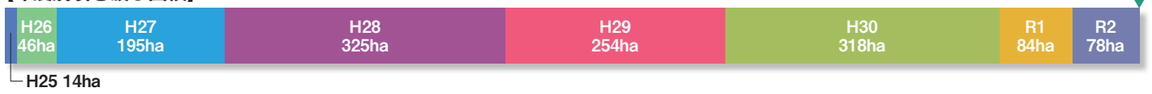
津波被災地域における復興市街地整備事業

土地区画整理事業、防災集団移転促進事業等による被災市街地のかさ上げ、高台新市街地の整備

❶12市町22地区において**約1,314ha**の整備を受託

令和2年度に78haを完成・引き渡したことにより全1,314haの整備を完了

【年度別引き渡し面積】



❷被災市街地復興土地区画整理事業の面積1,889haのうち**約6割をURが支援**

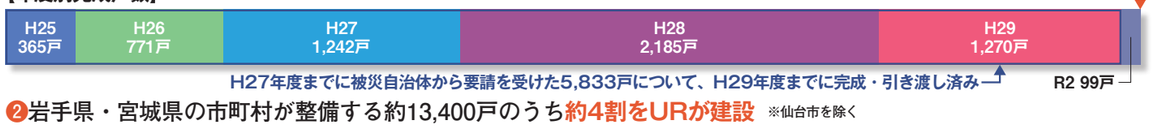
災害公営住宅整備事業

被災により住まいを失われた方、原子力災害により避難を余儀なくされている方のための公営住宅の建設

❶17県市町86地区において**5,932戸**を建設

令和2年度に99戸を完成・引き渡したことにより全5,932戸の整備を完了

【年度別完成戸数】



❷岩手県・宮城県の市町村が整備する約13,400戸のうち**約4割をURが建設**　※仙台市を除く

A 佐藤可士和展は東京都港区の国立新美術館で、2月3日から4月24日まで開催された。

B 国立新美術館。美術館のロゴも可士和さんがデザインした。

C 団地の未来プロジェクトの展示前で。左から高橋智隆さん、大月敏雄さん、隈研吾さん、URの中島正弘、佐藤可士和さん、清野由美さん、西沢邦浩さん、幅允孝さん。

D 可士和さんがデザインした「団地の未来PJ」のロゴの立体も展示された。

E 改修された洋光台団地の広場。柵を除いたり、芝生をはったり、プラス面を伸ばすことで、気持ちよく集まりやすい場所づくりを心がけたと可士和さん。

F 「団地の未来トークセッション@佐藤可士和展〜『集まって住むパワー』による新しい豊かさとは〜」と題して6名で行われたトークセッション。

佐藤可士和展で「団地の未来」について考えた

この春、国立新美術館で開催された「佐藤可士和展」は、
クリエイティブディレクター佐藤可士和さんの約30年にわたる活動を多角的に紹介する大規模な展覧会。
展示内容に加え、20代を中心に連日多くの人が来場したことでも話題を集めている。
会場では佐藤可士和さんが携わったURの「団地の未来プロジェクト」も紹介され、
3月2日には、館内でプロジェクト関係者によるトークセッションが開かれた。

クリエイティブの力を多くの人に伝えたい

「これも、そうなんだ」

ユニクロに楽天、セブンーイレブンに今治タオル……おなじみのロゴや商品が並ぶ会場のあちこちから、そんなつぶやきが聞こえてくる。さらに進めば、プロデュースした企業の社屋や病院、幼稚園の紹介、アートワークのコーナーもある。佐藤可士和展はデザインの力や可能性を示す構成になっていた。この展覧会で可士和さんが目指したのは、一般の人たちに「クリエイティブの力」を楽しく伝えることだという。

「クリエイティブってうまく使えば、すごくパワフル。クリエイティビティは誰もが持っているものなので、意識して活用すれば問題が解決したり、もっといいことが起きたりすると思うのです」

と可士和さん。アスリートでなくてもスポーツの力を、歌手でなくても音楽の力を感じているように、クリエイティブの力をたくさんの人に感じてほしい。クリエイティブを意識する人が増えれば、全体がいい方向へ進むと考えている。

ブランド戦略のトータルプロデューサーとして多方面で活躍する佐藤可士和さん。「クライアントの抱えている無意識な課題を意識化するのが仕事。今は箱(ハード)だけ変えても魅力的にはなりません。かたちにならないところも含めて考える必要がある。小さな差が大きな違いにつながります」

初めての挑戦 団地とコミュニティー

手がける仕事は多岐にわたるが、いずれもメディアとらえ、何を伝えたいのか、発信したいのか、それが伝わる方法を考えて展開するという可士和さん。会場で紹介されているURの「団地の未来プロジェクト(PJ)」も同様だという。築50年になる横浜市磯子区の洋光台団地をモデルケースとして、団地のもつ魅力を社会に発信する「団地の未来PJ」。建築家の隈研吾さんと佐藤可士和さんの監修のもと、洋光台駅前広場や北集会所・広場、住棟の改修などが進み、洋光台団地は活性化し、明るく心地よい空間に変身している。

団地やコミュニティーの仕事は初めてで、挑戦でもあったと話す可士和さん。

「これは社会課題解決PJ。クリエイティブの力で少しでもお手伝いできるのであれば、ぜひお役に立ちたいと思いました」と参加への思いを語る。

UR理事長の中島正弘は、自分たちで具現化できずにいた課題の明確化を、可士和さんをはじめPJメンバーの力を借りて進められたという。

「可士和さんは常にユーザー目線で、ユーザーにとって何が大事なのかを考えて、あるものを活かしながら工夫されます。相手の困りごとを見つけてアプローチする姿勢は、URのまちづくりにとっても非常に大事なことです」

PJメンバーによるトークセッション

3月2日に開かれた「団地の未来」のトークセッションでは、PJメンバーである清野由美さんの進行のもと、はじめにURの中島からPJの経緯(1970年代に建てられた団地の老朽化、住民の高齢化が進むなか、ハードとソフト両面からの団地のバリューアップの取り組み)を説明。テレワークに適した住居の提案や、団地内へのキッチンカーの導入など、団地活性化のための最近のURの取り組みも紹介した。

そして隈研吾さんからは、長年きれいにメンテナンスしながら住民が仲良く暮らしている日本の団地は世界の宝だという力強い発言があった。

隈さんと共に可士和さんが洋光台団地を歩いて感じたのは、住棟の間隔や向き、植栽や広場など、「いい意味でのゆるさ」だったという。そして関わるほどに、「集まって住むパワー」を感じ、その魅力、豊かさを考えるようになったと話す。たくさんの知恵、違った価値観を取り入れながらPJを進めたいとオープンイノベーション形式にし、ブックディレクターの幅允孝さんにも声をかけた。幅さんは洋光台団地に誕生したコミュニティーカフェに、テーマごとにセレクトした3冊の本とレジャーシートが入ったバスケットを置き、団地内に持ち出せるようにした。

「団地全体をライブラリーにと考えました。世代、時代を超えて同じものを共有できるのは本の魅力です」と幅さん。

そして東京大学大学院教授の大月敏雄さんは、このPJが10年かけて人間関係を耕し、丁寧に成果を蓄積してきた稀なものであると説明。支えてきたURを称え、今後への期待を寄せた。可士和さんにとっても、関わった仕事のなかで、このPJほど期間が長く、多くの人が関わっているものはないとのこと。

「もっといろんな方に参加してもらい、共に創っていかれたら。このPJをモデルとして、社会を変えていかれたら最高です」と締めくくった。

通っていた学校が近かったこともあり、洋光台団地は昔から身近な存在だったという建築家の隈研吾さん。「プロジェクトに新しい風を入れるなら可士和さんがいたらいいと思った」と自らメンバーに誘った。

UR理事長の中島正弘。あるものを利用し、その可能性を活かしながら、見せ方などちょっとした工夫で魅力的なものに変えていく可士和さんたちの力にいつも驚くと話す。

妹尾和子=文、菅野健児=撮影

※佐藤可士和展は5月10日まで開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、4月25日以降の開催は中止となりました。

DANCHI PICKS 楽しい団地

泉北桃山台一丁団地

SENBOKU MOMOYAMADAI ICCHOU

堺市とタッグを組み、新しい拠点をつくる

大阪府堺市

1967（昭和42）年にまちびらきした泉北ニュータウン。
URは地元堺市とともにニュータウンの魅力を見つめ直し、
多様な世代が生き生きと暮らす、新しいコミュニティーづくりをスタートさせている。

右／3月21日にプレオープンした「ももポート」の前で、ももポートのサインとともに立つ今回の仕掛人たち。後列左から店長の今橋さん、南海フードシステム社長の寺田さん、URの船塚。前列左から、堺市の三木さん、URの松尾、フォーシーカンパニーの畑さん。

プレオープンに合わせて、カフェで使う丸椅子をペイントするイベントが開かれた。イベントに参加した親子3代で団地に住む家族は、「ももポート」に大きな期待を寄せていた。

団地の機能をコンバージョンする

泉北ニュータウンにある桃山台一丁団地を舞台に、URが堺市とともに取り組むのは「団地コンバージョン推進モデル事業」。コンバージョンとは、用途転用といった意味で、団地の機能を、「食」「遊」「職」など、「住む」以外の用途に転用して、さまざまな世代の人が交じり合うミクストコミュニティをつくり、団地ににぎわいを取り戻すのがねらいだ。2017（平成29）年にURから堺市に声をかけて取り組みが始まった。

「泉北ニュータウンの約半分が公的賃貸住宅で、その3割がURさんの団地です。完成から50年以上経過した団地は、人口減少や高齢化が課題となっており、それを解決したいという思いがURさんと合致しました」と堺市でこの事業を担当する三木愛子さん。

まず手掛けたのは住戸のリノベーション。堺市とURの若手職員で意見を交わしながら、北欧の価値観と団地本来の和の空間の融合「#Japandi（ジャパンディ）」をテーマとしたリノベーション住戸を企画。これが若年層に受け、若い世代の入居が進んだ。

さらなる展開として、URと堺市が取り組んだコンバージョン事業が、新しいかたちのコミュニティーづくりだ。

「手探りのスタートでした。まず皆さんが何を求めているかを探るため、イベントを開催して何度もアンケートをとりました。そこから、常設の飲食の場がほしい、気軽にご近所づきあいができる場所がほしい、みんなで物をシェアしたりする場所がほしいといった声が多いことがわかってきました」とURの松尾知佳が振り返る。

そこで団地の集会所の一部を、団地の人だけでなく、地域の人々も気軽に出会い、集い、何かを始めるきっかけとなる拠点にコンバージョンすることにした。名前は団地住民の投票により「ももポート」に決定。URと堺市は、昨年3月に、この拠点を運営する人（運営者）、各種企画を実施する人（プレーヤー）と、これらの活動をサポートする人（サポーター）を募集することから始めた。

上／昔から大切にされてきたお地蔵さんの祠の前に立つ、泉北桃山台一丁団地の集会所。この中を改修して、一部が「ももポート」に生まれ変わった。外回りにはウッドデッキを造り、入りやすい雰囲気に。
右／「ももポート」のマーク。

プレオープンした「ももポート」。当面は金曜・土曜の10〜17時の営業を予定。お客さんの意見を聞きながら、営業を拡大していく予定だ。

見直されるニュータウンの魅力

堺市でこの事業を担当する高松 俊さんは「コロナ禍によって働き方が見直され、会社に行くことが必須でなくなってきた今、住宅地であるニュータウンの価値が見直されています。ここは公園が多く緑道も整備されていて、環境は抜群ですし、車で10分も走れば田園地帯が広がります。都市の利便性と田園地帯の両方のいいとこどりができる場所が、この泉北ニュータウンです。家の近くでお店を始めるのもいい。団地のカフェでテレワークするのもいい。ニュータウンの潜在的な魅力を引き出して、新しいにぎわいを生み出していければ」と団地の可能性を語る。

「ももポート」のサポーターに応募した皆さん。「多くの人にこの団地の良さを知ってもらいたい」と参加の動機を語ってくれた。

堺市の高松さんは泉北ニュータウン生まれ。立地の魅力から、ニュータウンの新たな可能性をもっと生かしたいと感じている。

「団地での事業は初めて。新たなチャレンジです」と話す南海フードシステムの村井寛明さん。

「サポーターの方々も年齢層は幅広く、自分の得意なことを生かしたい、空き時間に手伝いたいなどのお申し出もあり、期待が高まっていると感じています」とURの船塚清隆。「拠点が触媒になり、新たな化学反応が楽しみ」と笑顔を見せた。

プレーヤーが決定 外部の力を借りて発進

「ももポート」の運営は南海フードシステムに決定した。南海フードシステムは南海電鉄のグループ会社で、地域の利便性向上と、地域の価値向上にチャレンジしたいと手を挙げた。

「この取り組みを、鉄道会社の新しいビジネスモデルにしたいと考えています。URさん、堺市さんと話し合いながら、ともに住民の課題を解決していきたい」と社長の寺田 成さん。カフェの店長を任された同社の今橋沢美さんは、「お住まいの皆さんと仲良くなって、毎日来たいと思っていただけるような店づくりをしていきたい」と意気込んでいる。

また、URとともに運営を支援するフォーシーカンパニーは、地域の方々の参加を得ながら、イベントなどで機運づくりを進めてきた。今後も拠点運営の持続化に向けて取り組んでいく。

「ここに拠点ができたら、団地の人だけでなく、外の人ともつながれるのではないかなと期待しています。具体的にはカフェでブックシェアのサークルなどを始めたいと考えています。そして、皆さんにここが自分のまちだと愛着をもってもらえるようにしたいですね」と担当する畑 史子さんは言う。

「ももポート」が団地に住む人や地域の人々のリビングルームとして活用され、「ここに来れば誰かに会える」というようなみんなに愛される場所になる。そんな日は近いと感じた。

南海フードシステムは、昨年7月からキッチンカーを団地に出して、少しずつ定着を図っていった。団地の皆さんからは「珍しい料理を楽しみにしている」と好評だ。

武田ちよこ=文、菅野健児=撮影

URのまち

あのまち このまち 歩いてみよう！その26

愛知県 常滑市 飛香台周辺

URが手がけた土地が、時を経て、素敵なまちに育ちました。地図を手に歩いてみませんか？

	開発前	開発期間
飛香台	山林・田畑	2003年～2011年

0m 200m

N

生活に必要な実用品を造り続けて約1000年！ 常滑焼の歴史

現存する日本最古の窯場！

1 平安時代末期 六古窯の父！

薪の窯で主に大型の壺や甕を作成。

海が近かったので、大きな陶器は船で日本各地に運ばれ、他の地域に多くの影響を与えた。

六古窯 常滑、瀬戸、信楽など国内6つの代表的古窯。

2 江戸時代後半 朱泥急須登場！

煎茶がブームとなり、中国風の朱泥の急須が作られるように。

中国のハイレベルな技術を積極的に取り入れた。

朱泥 鉄分を多く含む粘土を焼きしめた赤褐色の陶器。

3 明治時代～ 土管で大繁栄！

横浜や東京の都市化の際にかたく焼きしめた常滑の土管が大ヒット！

田畑の灌漑や上下水道管、建物の給排水管など用途はさまざま！

窯の中にも客席が。当時の釉薬が煌めく。

共栄窯 土管工場を改装したバー&ビストロ。

生産量日本一!!

常滑の招き猫

ふっくら2頭身のかわいいフォルムが特徴！

商売繁盛を表現。

駅のホームからも見えます

高台から常滑を見守る！

巨大！とこにゃん

常滑ゆかりの作家39人が作った猫のオブジェが壁に並ぶ。

とこなめ招き猫通り

常滑市陶磁器会館

やきもの散歩道スタート地点。散歩マップをゲット！

懐かしい味にホッコリ♪

だんご茶屋

ショップや陶芸体験工房が並ぶ。

常滑焼の窯元や陶器ショップが並ぶ。

神明社

常滑焼の狛犬

登窯(陶栄窯)・国指定重要有形民俗文化財・近代化産業遺産

日本に現存する最大級の登窯。8つの窯が階段状に連なる。

煙突は10本！

知多横断道路

やきもの散歩道は狭い道や坂道が多いので、歩きやすい靴と服装で！

すてきなお店がたくさん！

土管工場を改装！

常滑屋

地元の料理やお酒を常滑焼の器で提供。

手こね寿司「常滑ちらし」

味も器も◎！

ミニ常滑みやげコーナーもあり！

鬼崎沖の海苔

澤田酒造の日本酒

MADOYAMA

1Fは地元作家の陶器や雑貨のショップ。2Fはゆったりカフェ。

人気のパフェはダブルサイズもあり！

コーンフレーク別添え♥

morrina

地元の若手作家の普段使いできる器を揃えた店。

すてきな急須もたくさん！

中の茶こしも陶器製！

UR 常滑都市計画事業 常滑西特定土地区画整理事業 常滑東特定土地区画整理事業

飛香台

約71haの大住宅地！

北条公園

大雨時、調整池の機能あり。

常滑市民病院

耐震補強し、海側から移転。

常滑市役所新庁舎（令和4年1月移転予定）

東京で30年勤めたあとふるさとの常滑に戻って来ました。常滑散策ではぜひガイドを頼んでください！見るだけではわからない奥深い常滑史をご案内します！

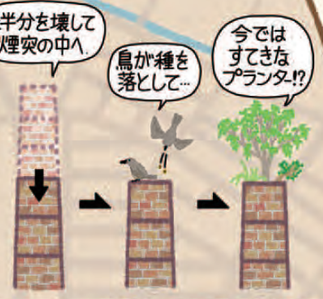
常滑市シルバー人材センター 観光ガイドBlue Ocean 山本 隆男さん

「やきもの散歩道」エリア

明治～昭和の常滑焼工場や窯、煙突が数多く残るエリア。

煙突のある風景

最盛期に約400本あった煙突。現在は約70本に減り、今でも使っているのは6本のみ。



真っ黒い建物

燃料の薪と石炭のすすでスズメも真っ黒！

塩害をさけるため、工場も民家もコールタールを塗ったり焼き板を使ったりで真っ黒！

焼き物の再利用

製品の不良品や使用済みの窯焼き用品を活用！

再利用の代表選手！

①土管坂

明治時代の土管の不良品

昭和初期の焼酎瓶の不良品

土管焼成時の焼台(廃材)

②でんでん坂

すべらない!!

何度も焼かれてとっても固い焼台

名鉄常滑線

常滑駅

伊勢湾

常滑港

中部国際空港

名鉄空港線

INAX ライブミュージアム

街中にも個性豊かな常滑焼の積み上げがたくさん！探してみよう♪

6つの館で構成！

土とやきものをテーマにものづくりの心を伝える体験・体感型ミュージアム。

窯のある広場・資料館

大正時代の土管・工場の窯・建物・煙突を修復保存、公開している。

・国登録有形文化財
・近代化産業遺産

迫力！

わかりやすい！

土管を焼き上げる様子を窯の中でプロジェクションマッピングで再現！

世界のタイル博物館

5500年前から現代まで、世界中の装飾タイルを収蔵・展示。

古便器コレクションも！

土・どろんこ館 陶泉工房

体験メニューが豊富！

光るどろだんごづくり

モザイクアート

INAX(現LIXIL)の前身・伊奈製陶は1924年に常滑で創業。今は、衛生陶器やタイルが有名ですが、かつては土管をたくさん作っていたんですよ。

INAXライブミュージアム 磯村 司さん

※UR都市機構が手がけた地区を中心にマップを作成しています。掲載した情報は2021年3月現在のものです。

山本郁子=イラスト

復興の「今」を見に来て！
第22回
盛岡市
岩手県

岩手山を望む災害公営住宅が完成 新しい暮らしが始まった

南青山アパートはIGRいわて銀河鉄道に乗って盛岡駅から一つ目、青山駅から徒歩約10分。3階建てと4階建ての4棟からなり、2DK～4DKの3タイプある。

JR盛岡駅で2両編成のIGRいわて銀河鉄道に乗り換え、走り出すとすぐに線路の脇に真新しい集合住宅が見えてきた。URが岩手県からの依頼を受けて造った災害公営住宅「県営南青山アパート」だ。

避難した人たちの新しい住まい

ここは岩手県で最後に整備された災害公営住宅。URに依頼した理由を、岩手県建築住宅課の古川亜子さんはこう話す。

「南青山アパート整備事業は、市街地の鉄道に近接した建設用地の造成をともなった難易度の高い事業です。沿岸部から内陸部に避難された方の住宅再建を迅速に進めるためにも、予定期間内に完成させる必要があり、これまでのノウハウと経験豊富な人材をもつURさんに依頼しました」

URは2019（令和元）年に建設工事に着手、昨年12月に建物は無事に完成した。建物が造られたのは、線路に沿って防雪林が植えられていた場所だ。

岩手県建築住宅課の古川さんは、被災地である釜石市出身。「URさんには敷地条件や整備期間など、難易度の高い事業に丁寧に対応していただき感謝しています」

「鉄道の運行を止めず、近隣の住宅地への振動や騒音を低減させながらの工事。工期も厳しいなかでしたが、心待ちにしている入居者をお待たせするわけにはいかないと、何とか期日通りにやり遂げました」とURの担当者は安堵の表情を見せた。

10年目に始まった快適な暮らし

南青山アパートは全部で99戸。今年の2月半ばから入居が始まった。その真新しい部屋に招いてくださったのは、釜石市から避難してきた佐々正弘さん、順子さん夫妻。4階の住宅のベランダに出ると、右手に雪をかぶった岩手山の堂々たる姿が見えて、心がなごむ。

「景色がいいでしょう。室内の広さは十分だし、引き戸のトイレなどバリアフリーが徹底されていて、高齢の私たちにも暮らしやすい。1階に各戸専用の物置スペースがあるのもうれしいですね。雪かき用のスコップや漬物樽だとか、雪国の暮らしにこういうスペースは欠かせないですから」

武田ちよこ=文、菅野健児=撮影

地元のシンボル、標高2,038mの岩手山に抱かれるように建つアパート。すべての住戸のバルコニーから山容が眺められる。すぐ右手に鉄道線路が走っている。

建物中央のオープンスペースに集会所と常駐型復興支援拠点を配置した。取材に訪れた3月11日、ここで手作りの牛乳パックの灯籠（とうろう）に火をともす「ちいさな祈りの灯火」が行われた。

こう話す正弘さん。自宅は津波で全壊し、これまでは息子家族の住む盛岡市で、民間アパートを借りて住んでいた。

「同じアパートの人とは、会えば挨拶をする程度。同じような境遇の人はいないので、共通の話題がないんです。でも、ここに入居するときに参加した町内会の交流会では、同じ釜石市の人が何人もいて、『大変だったね』と話せば親近感がわいてきます。10年はあっという間。みんなに助けられてここまできたので、これからは自分たちでやっていきたいと、そういう思いでこのアパートの入居を決めました」

こう話す順子さんの表情は明るかった。

URのノウハウを生かして

新しい住宅に住む人たちのコミュニティーづくりにも、URのこれまでの災害公営住宅づくりのノウハウが生かされている。線路に沿った南北に細長い敷地に建つ4棟の中央に、集会所と「青山コミュニティ番屋」と呼ばれる常駐型復興支援拠点が置かれている。集会所は入居予定者からの要望を受け、高齢者が利用しやすいよう土足で入れる土間空間をメインにした。正面には、他の災害公営住宅で喜ばれた共同花壇を作り、春には入居者たちが花を植えるイベントを開催予定だ。

入居前から地域の町内会とも連携をはかって交流会などを開催。昨年10月には、URの提案で、建設時に伐採した木を使った表札づくりのワークショップを開いて好評だった。入居者同士はもちろん地域も巻き込んで、新しい暮らしが始まっている。

懐かしい写真を見せてくれた佐々さん夫妻。「この10年間は、孫たちの部活動を家族みんなで応援することに没頭する時間がもてて、恵まれていました」。ここをふたりの終の棲家と考えている。

鉢植えで楽しんでいたサンスベリアとワイヤープランツは、ハイドロボールを利用してガラスの器に移してスッキリと。根が小さかったテーブルヤシはジェルポリマーを利用(右)。

素敵に飾る インテリアグリーン vol.6

ハイドロボールに植え替えて気軽に楽しむ観葉植物

文・写真 貝賀あゆみ

食卓やキッチンでグリーンを楽しむのなら、土ではなくハイドロボールを使う方法をおすすめします。ハイドロボールは粘土を焼いて発泡させた茶色いボール状の土。多孔質で水や空気を蓄える性質があり、底穴のない容器が使えます。水受け皿は不要ですし、テーブルに土がこぼれたりコバエが発生したりする心配もありません。

百円ショップで売っている安価なミニ観葉植物をハイドロボールに自分で植え替えることもできますよ。ガラスなどの容器に根腐れ防止剤を入れ、その上にハイドロボールを入れます。土から苗をそっと抜き、水でやさしく根を洗ってピンセットを使って丁寧にハイドロボールに移植します。

ガラスの容器を使うと水の量も一目でわかります。はじめに容器の高さの1/5位まで水を入れ、この水がなくなったら水やりのタイミング。鉢の温度が上がりやすいので、置き場所は半日陰がよいでしょう。

植え替えのときに折れてしまった茎や、根が小さくてハイドロボールでは支えられないものを、私は透明なジェルポリマーを利用して飾っています。涼し気でこれからの季節におすすめですよ。

キッチンで楽しみたいハーブの鉢植えのアイデア。貼ってはがせる強力両面テープで壁に貼りました。そうじの邪魔にもなりません。重くならないように土は少な目に。

かいがあゆみ

フォトスタイリスト。読者数12万人をこえるアメブロ公式ブログ「インテリアと暮らしのヒント」メンバー。暮らしを楽しむアイデアを自身のブログや雑誌等でも発信している。https://ameblo.jp/rogstyle/

防災、待ったなし! 6

防災アドバイザーが常に持ち歩くグッズとは?

文・写真 高荷智也(ソナエルワークス代表)

いつ、どこで巻きこまれるかわからない災害時に、ちょっとした道具の有無が生死を分ける可能性も。今回は、防災のプロが通勤リュックに入れて持ち歩いている必須アイテムをご紹介します。

最少アイテムはライトと笛

持ち歩く防災グッズを最小限に絞るとしたら、LEDライトと笛を選びます。私の場合はキーポーチにミニライトとホイッスルを入れて、リュックにぶら下げています。これらすぐ使いたいアイテムは、手を伸ばせば届くところにぶら下げるなどの工夫を。

身の安全を守る道具

自分の身の安全を守る道具も不可欠です。おすすめは「踏み抜き防止インソール」。普段履いている靴に入れておくと、釘やガレキなどの踏み抜きを防いでくれます。バッグに余裕があれば、軍手(手袋)や雨具(コンビニのレインウェアで充分)があると、防寒具代わりにもなり大変便利です。

ハサミで切れる特殊繊維・踏み抜き防止インソール。

スマホ対策&情報収集の道具

スペースがあれば情報収集の道具も入れましょう。普段からモバイルバッテリーを使っていればそれを。非常用に準備する場合は、長期保存ができて交換も可能な「乾電池式スマホ充電器」がおすすめ。また、ポケットラジオがあれば情報収集に大変役立ちます。

無理のない範囲で必要なものを

私が通勤リュックに入れている道具を全て並べてみました。パソコンなどの仕事道具とあわせると20kg以上になります。防災グッズは重要ですが、無理をすると長続きしません。楽に持ち歩ける分量のなかで、必要な物を選択することが重要です。

ミニライトと笛を入れたキーポーチ。

私が持ち歩いている防災グッズです。

たかにともや

「備え・防災は日本のライフスタイル」をテーマに、自身が運営するWebサイト、各種メディアやセミナーを通じて防災を解説するフリーのアドバイザー。

「備える.jp」 https://sonaeru.jp

栗原心平の オトコめし 6杯目

休日、頑張って家族のために料理する! そんなパパへの応援レシピ

鶏のみそごまがらめ丼

ごはんにのせる具材はシンプルに鶏肉とねぎのみ。白すりごまの風味が生きたみそダレによって旨味が増した鶏肉を味わいましょう。ごはんがすすむこと間違いなしの食べ応えのある丼です。

くりはらしんぺい

1978年生まれ。料理家、「ゆとりの空間」代表取締役社長。料理番組『男子ごはん』(テレビ東京系列)に出演中。3月に『栗原心平のごちそうキャンプ』(小学館)を発売。30分以内に作れる「おつまみレシピ」などを紹介するYouTubeチャンネル「栗原心平ごちそうさまチャンネル」も人気。

http://instagram.com/shimpei_kurihara

材料(2人分)

- 鶏もも肉……1枚(300g)
- 塩……小さじ1/3
- 黒こしょう……適量
- 片栗粉……大さじ1
- A
  - 白すりごま……大さじ1½
  - みそ……大さじ1
  - 酒……大さじ1/2
  - しょうゆ……小さじ1
  - 砂糖……小さじ1
- ごま油……大さじ1
- 温かいごはん……2人分
- 青ねぎ(小口切り)……適量

作り方

❶鶏もも肉は8等分に切り、塩、黒こしょうで下味を付けて片栗粉をまぶす。Aは混ぜ合わせておく。

❷フライパンにごま油を熱し、皮目を下にして鶏肉を並べる。蓋をして中火で焼き、皮目に焼き色がついたら裏返し、さらにじっくり焼く。

★中まで火が通ったかの目安は、箸で触ったときに感じるかたさ(弾力)。

★鶏肉から脂がしっかり出ている場合は、Aを入れる前にキッチンペーパーなどで余分な脂を取り除く。脂が多いと焦げてチリチリになってしまう。

❸鶏肉に火が通ったら、Aを回し入れ、からめながら手早く炒める。全体がなじんだら火を止める。

❹器に温かいごはんを盛り、❸をのせて青ねぎをかける。

パパのごほうび乾杯

こってりしたみそ味の鶏肉には炭酸飲料が合います。ビールやハイボールでガツンといきましょう。

青木 登=撮影

UR INFORMATION

UR都市機構からのお知らせ

NEWS

URフォトコンテスト、作品募集中！

URでは東日本大震災からの復興と、団地の風景や暮らしを感じるフォトコンテストを開催します。今年から、従来の郵送・HPでの募集に加え、新たにInstagramでも作品を募集します。締め切りは5月31日（月）。たくさんのご応募をお待ちしています。

UR都市機構フォトコンテスト2021

- **応募締め切り**　2021（令和3）年5月31日（月）
- **応募作品イメージ**
  （復興）東北の復興を感じる場面や生活がうかがえる場面など
  （団地）四季折々のUR団地の風景、暮らしなど
- **応募資格**　どなたでもご応募いただけます
- **賞**　大賞2点（商品券10万円相当）、
  優秀賞6点程度（商品券5万円相当）、
  入賞16点程度（商品券1万円相当）
- 応募方法など詳細は、下記HPにてご確認ください。

https://www.ur-net.go.jp/aboutus/action/photocontest/2021

EVENT

「日経地方創生フォーラム」を開催しました

2月1日、URは日本経済新聞社と共催で「地方都市再生の実現に向けて」をテーマに日経地方創生フォーラムを開催しました。当日は小諸市の小泉俊博市長、福山市の枝広直幹市長が基調講演。UR地域活性化推進役の堀井伸也が、地方都市再生の実現に向けたURのまちづくり支援についてプレゼンテーションし、識者らによるパネルディスカッションが行われました。このフォーラムの様子はネットを通じて配信されました。

上／オンラインでの登壇者も交えてのパネルディスカッション。
左／「地方都市再生に向け、首長や市民とともに考えていきたい」と語るURの中島理事長。

From Editors

東日本大震災から10年がたちました。例年ですと東北では4月中～下旬に満開の桜が楽しめるそうです。

桜といえば、津波到達地点への植樹や東北沿岸各地に311本の桜を植樹するための基金、後世への教訓としてのプロジェクトや桜に思いを寄せる人々の交流をはぐくむ事業がいくつもあるようです。私はこれらの活動を震災から数年後に知り、10年ほどたてば幹も太くなって見応えのある桜に成長するだろうと、旅の計画に盛り込んでいました。

ところが、今年はあっという間に桜前線が駆け抜けてしまい、桜を見ることはかないませんでした。来春、ぜひ桜を見る旅を実現したいと思います。

（UR都市機構・広報担当AT）

次号のお知らせ

「UR PRESS」66号は2021年7月末発行予定。

「UR PRESS」オンライン版もお楽しみください！

「UR PRESS」はパソコンやスマートフォンでもご覧いただけます。
紙面にはない巻頭インタビューの動画なども掲載しています。
ぜひご覧ください。

UR PRESS　で　検索

https://www.ur-net.go.jp/aboutus/publication/web-urpress65/index.html

YouTubeでもさまざまな動画がご覧いただけます

UR都市機構の公式YouTubeでは、UR賃貸住宅、都市再生、震災復興など、URのさまざまな事業や情報を動画でお伝えしています。『UR PRESS』オンライン版でこれまでに紹介した動画や、テレビCMなどもアップしています。
ぜひご視聴ください。

https://www.youtube.com/user/URTOSHIKIKO/

CROSSWORD PUZZLE&PRESENT

プレゼント付きクロスワードパズル

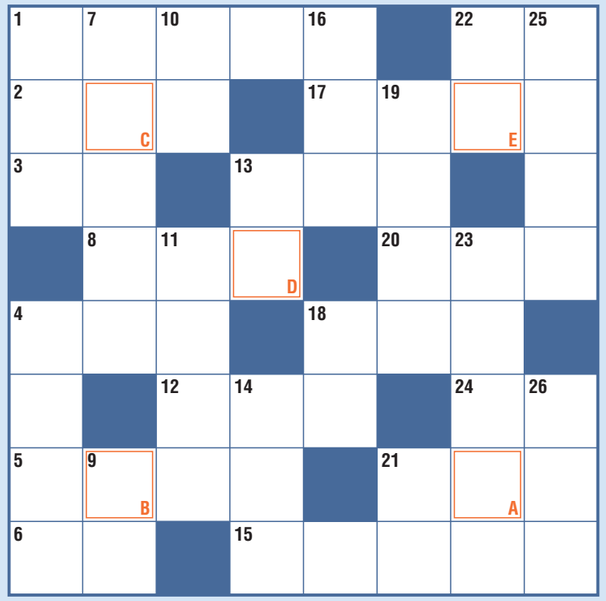
パズル制作 ニコリ

ヨコのカギ

1 昔のお侍が暮らした建物。
角館や金沢、松江などのものは観光名所として有名
2 中央がくびれた、日本古来の打楽器
3 掛け算の基本
4 ごはんを作ること
5 がんばるぞ、というとき頭に締める
6 ――のめり　――倒し
8 ――クライミングは岩登り
12 サツキやシャクナゲはこの仲間
13 ――列車　――選挙　――自動車
15 混雑した店内は、――でむせかえるようだった
17 画家や彫刻家の仕事部屋
18 失敗しても、――の闘志で何度でもチャレンジする
20 つかまえること
21 砂糖をなめると感じるもの
22 花の蜜を集める種類もいる
24 ボールの受け渡し

タテのカギ

1 ガイド――　――カバー　スクラップ――
4 ビーチに広がっているもの
7 猫や犬は、体をなめて――をします
9 三人寄れば文殊の――
10 光がなく真っ暗
11 矛盾した話では、あわないもの
13 笑う門には――来たる
14 あの子がもう成人か、
――の経つのは早いものだ
16 ヘクトパスカルで表します
18 棚を作って咲かせる花
19 URは、東日本大震災で被災した
――地方の26の自治体で
復興まちづくりを支援しています
21 目。――シャドー
22 時計の文字盤で回るもの
23 キュウリを芯にしています
25 格子縞。タータン――
26 バイオレットとも呼ばれる春の花



A　B　C　D　E

64号の解答

A フ　B タ　C バ　D マ　E チ

1 ア	6 オ		13 オ	モ	17 イ	20 デ	
2 マ	フ A	10 ラ	ー		18 チ	マ D	24 タ
	7 ピ	ン		15 タ	バ		ケ
3 ツ	ー		14 カ	ハ	ン	21 ス	ウ
4 ツ	ク	11 リ	カ	タ B		22 タ	マ
カ		12 ヤ	ク		19 ヘ	ン	
5 イ	8 チ E	ク		16 ゲ	タ	バ C	25 コ
	9 カ	ズ	ノ	コ		23 イ	ト

プレゼント

クロスワードパズルを解いて、プレゼントにご応募ください。

PRESENT 1 From 女川
「学園カレー」3名様

女川高等学園の食品製造コースの生徒たちが専門家の指導のもとで商品開発した「学園カレー」。レトルトパウチ（210ｇ）を3パックセットで。

PRESENT 3 From 陸前高田
「奇跡の醤（ひしお）」3名様

東日本大震災の津波で工場内のすべてを流された八木澤商店。研究所に預けていた「もろみ」が奇跡的に見つかり、それを培養して仕込んだ旨味の強いこいくち醤油。500㎖。

PRESENT 2 From 南三陸
「南三陸ワイン」3名様

豊かな自然を生かしてワインづくりに励む「南三陸ワイナリー」のマスカット・ベーリーA（赤・辛口）。イチゴの香りのやさしい酸味と厚みのバランスがいい、口当たりのよいワインです。750㎖。

PRESENT 4 From 気仙沼
「手づくりスイートゴット」3名様

気仙沼「バルボー」の人気菓子。厳選された素材を使って、熟練職人がスポンジ、サブレ、フレンチパイを重ね合わせた上品なスイーツ。8個入り（季節によって内容に変更あり）。

PRESENT 5
『緊急事態宣言の夜に』3名様

本誌のスペシャルインタビューでご紹介している、さだまさしさんの最新刊。コロナ禍での思いや活動の記録が収められています。サイン入り。

●応募方法
本誌付属の応募はがきに、クロスワードパズルの答えと希望プレゼント番号、必要事項をご記入の上、郵送してください。
※応募はがきに記載のQRコードからもご応募いただけます。

●応募締め切り
2021年7月31日㊏（当日消印有効）
当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。
※お酒のご応募は20歳以上の方に限らせていただきます。